

# たぬきの三平

松永ひろし

## 目次

三平、空を飛ぶ	2
ヤマナシ	3
三平、危機一髪	4
ゴムとばしグライダー	5
川流れ	6
セミ取り	7
木守りリンゴ	8
カラス天狗	9

わた飴	10
かかし	11
盆踊り	12
三滝	13
河童	15
数え唄	16
わんわん	17

### 三平、空を飛ぶ

五月。田植え前の広い田圃地帯に、色とりどりの熱気球が浮かんでいます。「第一回稲の里バルーンフェスティバル」です。

会場の北の、稲穂神社の鳥居下で、年寄りたぬきの三平がその光景を眺めています。わしも乗りた（きれいだなあ。箆に人が乗ってる。わしも乗りたいなあ）

乗りたくて乗りたくて、三平は、農用水の堰を伝って、熱気球に近づきました。が、

「あれえ？ たぬきだ！」

と男の子に見つかってしまいました。三平は、堰の中を必死で逃げました。が、みるみる人びとに間を詰められました。

「おーい、こっちだ、こっちだ」

前方に、立ち上がって手招きする黒いたぬきがいいます。三平が走り着くと、黒いたぬきは小川の土手

で暗い穴をみせる「コンクリート管の中に飛び込み、三平も続きました。」

「もう大丈夫。なぜ、人間に追われたんだい」

黒いたぬきに訊かれ、三平は応えました。「空にうかぶきれいなものに、わしも乗ってみたいなんて、近よってしまっただ」

黒いたぬきは、意外なことをいいました。

「爺さんは、人間に化けられないのかい？」

三平が「化けられない」というと、黒いたぬきは、明日の昼までに、縄を編んで、丈夫なもっこを作るように、といました。

翌日、作ったもっこを持って三平が神社の鳥居の前で黒いたぬきを待っていると、バルーン会場から、両手にたくさんの風船を持った子どもたち九人が列になって向かってきました。驚いた三平が逃げようとする、

「爺さん、おれだ、おれだー」

と先頭の男の子がいうや、バツと黒いたぬきに身を変えました。それを合図に、子どもたちが次々と、たぬきの姿になりました。

そうです、人間の子に化けて、風船売りの風船を  
買い集めたのです。

読者のみんなは、もうわかりましたよね。

三平爺さんは、みごとに空へうかびました。

### ヤマナシ

年寄りたぬきの三平は、ツリフネソウの赤い花が  
咲き乱れる山の谷間で、黒いたぬきに出会いました。  
黒いたぬきがいきました。

「爺さん、ひそひそじぶりだね。」の山に用かい」

「あの時はありがとつ。今日はヤマナシの実が、熟  
して落ちていないか見にきたんじや」

「あんなまずいものをかい。だいいち硬くて爺さん  
の歯じゃあ、かじれんだろつ」

「酒じゃ、ヤマナシ酒じゃ。わしは上手だぞ」

「その手が。焼酎はあるかい」

「神社の中に夏祭りの残りがあつてのつ」

「そいつは上出来だ。よし、手伝つよ」

たぬきたちは、神社備えの猪口で香りのよいヤマ  
ナシ酒を飲み、ヤマメをかじり、たぬき音頭を歌っ  
て、踊りました。

共に飲んで踊った三平が寝て起きたとき、黒いた  
ぬきたちはいませんでした。ヤマナシ酒は広口びん  
に半分ほど残っています。手をつけていないびん  
は三つもあります。三平は、早くも次の満月が待ち  
遠しくなりました。

### 三平、危機一髪

稲穂神社の床下の穴をねぐらにしている年寄りた  
ぬきの三平が、春のある日、近くの川の畔をあるい  
てゆくと、さいさな木舟が杭につながれていました。  
乗り込むと、舟はぐらつと横にゆれ、なんとも定  
まらない不安定さが、三平は気に入りました。舟底  
に仰向けになると、お日さまがまぶしくて、目を瞑  
りました。

黒いたぬきは、三平とヤマナシの森にいきました。  
森はヤマナシの実のとてもいい匂いに包まれていま  
した。三平はそこで布袋に実を八つほど拾うと、黒  
いタヌキに礼をいってねぐらの稲穂神社に戻りまし  
た。

翌日の昼下がりに、「爺さん、いるかい」と社殿の  
前から声がしました。三平が床下の穴から這い出る  
と、大きな紙袋を両手にさげた黒いたぬきが立って  
いました。そして、

「爺さん、焼酎と広口びんと氷砂糖だ。この袋はヤ  
マナシの実だ」といいました。

「こんなにたくさんの実をどうするんだい」

「そこは頼みだ。爺さん得意のヤマナシ酒を仕込ん  
で欲しいんだ。気分がうかれる満月の夜、仲間と飲  
みにくるからよう」

「お安い御用だ。空を飛べた恩義もあるしな」

黒いたぬきは翌日も紙袋を届けました。

やがて、満月の日。黒いたぬきは、仲間八匹と神  
社にやってきました。それぞれが、「三匹のヤマ  
メを笹に通して持っていました。」

「おい、舟でたぬきがひっくりかえってるぞ」

「死んでるんかや」

「いや、腹がうごいてる。寝とるな」

「この舟の持ち主で漁師の権三と手伝いの佐助で  
す。二人は、すばやく三平の手足を舐い綱で縛りま  
した。気がついた三平は、

「うわ、たいへんだ、たすけてくれ」

と叫ぶのですが、二人には、キーツ、キーツとしか  
聞こえません。権三がいきました。

「たぬきって奴は、半殺したと血の中に胆が混じっ  
て、肉が食えんようになるそつだ。猟師の善蔵に一  
発で撃ち殺してもらつて」

二人は三平の手足の間に舟の櫂を通して三平を担  
ぎ上げました。

その時、道の前から、青い祭り絆纏を着た男の子  
が、たぬき音頭を唄ってやってきました。そして、  
「そのたぬき、おいらに売ってよ」

「いいました。権三が訊きました。」

「童、買ってどうするだ」

「たぬき汁にして喰つ」

「高いぞ、二万円だ。払えるか、重だてらに」  
と権三がいつと、男の子は権三の手に二万札を二枚  
乗せました。権三が、

「そのためきは重いぞ、童一人では運べんぞ」  
といつと男の子は、

「大丈夫、友だちが来るんだ。ほら」

といつと道の先を指差しました。

祭り絆纏の子どもが八人、走ってきます。

三平は、ためき汁にはなりませんでした。

ゴムとばしグライダー

春の朝早く、稲穂神社床下の巢穴から這い出た年  
寄りためきの三平は、鳥居をくぐり、その先の農道  
へ歩いていきました。

すると右端の草むらに、玩具のグライダーが落ち  
ていました。近くの村の子たちが、田んぼで飛ばし  
ている厚紙のグライダーです。

三平はグライダーを拾いあげました。傷も汚れも  
なく、新品のような姿です。

(この子が忘れていったのだらう)

遊んでいた子を思いながら三平は、グライダーの  
底をつまんで前へ投げてみました。グライダーは真  
つ直ぐ音もなく飛んで、七、八メートル先の赤土道  
に滑り降りました。

(きれいに飛ぶなあ)

うれしくなった三平はさらに力をこめてグライダ  
ーを放つと、グライダーは急上昇し、ぐるっと回っ  
て、傍らの田んぼの真ん中辺りに落ちました。三平  
が拾いあげたとき、

「爺さん、いいものが、あったじゃないか」

と声がして、後に黒いためきがいました。

「おお、こんちは。こいつが、あそこの道端に落ち  
ていたんでな」

「爺さん、そいつは手で飛ばすんじゃなくて、ゴム  
で飛ばすんだ。高くまで飛ばせ」

「そうか、ゴムか。ゴムは落ちてなかったな」

「爺さん、神社に輪ゴムはあるかい」

「はて、どつだったかのう」

「探してみようぜ」

神社の中を探すと、祭り提灯がたたまれた木箱に、  
紙袋に入った輪ゴムがありました。黒いためきは、  
輪ゴムの四つ繋げ、そして端の輪ゴムを割り箸に巻  
きつけました。

輪ゴムで飛ばしたグライダーは、神社の社のケヤ  
キの大木よりも高く飛びました。

三平と黒いためきは、交代して飛ばし、グライダ  
ーの飛んだ高さを競いあいました。

やがて、黒いためきが帰ると、三平はグライダー  
を朝見つけた場所にもどしました。

(わしらが遊んだと、気づくかな)  
と思ひながら。

川流れ

暑い夏の日、年寄りためきの三平は稲穂神社近く  
の川で水浴びをし、岸に上がって身体を振り、毛に

ついた水を弾きとばしました。

と、上流が騒がしくなりました。

「たいへんだ。みよちゃんが流された」

川で流された子を追って、子どもたちが川岸を走  
ってきます。

三平はあわてて傍のミノハギの群の中に隠れまし  
た。そして上流をうかがうと、川の流れは瀬で速く  
なり、流される子を追う子どもたちは離されるいっ  
ぽうです。

三平はミノハギの群の中から下流をのぞきまし  
た。人は、だれもいません。

(このまま流されたら、本流だ。子どもの命があぶ  
ない)

と思った三平は、後先もなく川に向かって走ってい  
ました。

流れが速い瀬で子どもを受けとめるのは難しいと  
考え、流れが穏やかなる下流の淵へ向いました。  
ところが、その淵は深く三平の足が川底につきま  
せん。

(こりゃあ、どつしたもんだへ)

と四つ足で懸命に水をかいていると、女の子があおむけになって頭から流れてきました。

三平は女の子に頭をぶつけ、その左肩に鼻先を押しつける、足ではげしく水をかき、岸に向おうとしました。でも、水をかく力は弱く、岸に近づけません。そうこうするうち、追ってきた子どもたちが騒ぎました。

「たいへんだ。ためきが、みよちゃんを食ってるぞー」

助けてやっているのになんて事をいつ子どもたちだと三平は憤慨しました。が、子どもたちに捕まれば自分の命が危険です。この子を助けようか、逃げ出そうか迷っていたとき、

「爺さんよくやった、後はおれが引き受けた」と声かけて、青い浴衣をきた男の子が横から水に入ってきた。

三平は男の子が誰だかすくわかりました。後はまかせて、稲穂神社へ逃げ帰りました。

### セミ取り

その日は朝からセミの声が稲穂神社の社をにぎわしました。神社の床下にあるねぐらから這い出た年寄りためきの三平は、

「朝っぱらから、なんともうるさいセミだ」とつぶやいて、眠い目をこすりました。

（おっ、子どもたちがくる）

虫取り網をもった男の子たちが五人、大鳥居をくぐって神社の境内に向ってきます。

三平は床下の柱の陰で様子を伺いました。

子どもたちはそれぞれ、鳴き声のする木に近寄り、網を振り回します。

「わっ、しょんべんだ。逃げしょんだ」

の声。木から飛び立つセミは、吸っていた樹液を放ちます。つまり、セミの小便です。

「ごうたかや」

と右奥から声が出ました。応えて子ども声。

「おめおっ、とった。アノセミだ」

「おめお、ミンミンだ」

三平は一人の男の子に目が止まりました。タレ付きの青い帽子をかぶった保育園の子です。持っている網は竹竿が短いので、高いところのいるセミはとどきません。ジャンプして竿を振りますが、とどきません。

それを見て三平は、（なんとかあの子にセミをつかまえさせたいな）と思いました。

するとその時、

「正太、自分で一びきは、つかめろぞ」

といて、小学校の上級生らしい男の子が正太に近づくと、正太の両足の股の間に自分の頭を入れて、てんてんまをします。

「どうだ、網が木のセミごとくみたいか」

「うん、うん」

「なら、おらがそつと木に近づくから、おめえはゆっくり網をセミにちかづけな。そして一気にパツとかぶせるんだ」

「うん……、わっ、みっちゃん、入ったよ」

「正太、竿を回すんだ。セミが逃げんやうに」  
「うん」  
すく目の先のできうとで、三平は、ほっくらした気持ちになりました。

### 木守りリンゴ

年寄りためきの三平は、多くのためきと同じで木に登ることが下手です。それで、リンゴ畑では落ちているリンゴを探します。

大風が吹いた後は、食べきれないほどのリンゴが落ちていて、三平はせつせと稲穂神社床下のねぐらに運びました。リンゴはかなり日持ちしますので、三平にとってはありがたい保存食なのです。

ある日の夕刻、三平がいつものリンゴ畑にいくと、

リンゴはみんな収穫されていました。

（あれ、え、おそかったか、残念ー）

それでも、取り残したリンゴがあるかもしれないと考えた三平は、リンゴ畑を歩き回りました。



それからは境内にての催しで、わた鮎屋が加わるたびに、誰か落さないかなと願っていたのですが、だれも落してはくれません。

「黒いためきなら、人間に化けて、わた鮎を手に入れることができるのになあ」

と三平は思いました。でも、三平は黒いためきがどこに棲んでいるのか知りません。

「この年の秋祭りでも露店の列にわた鮎屋がありました。夕方になり、発電機がうなると、それぞれの露店に電灯の明りが点りました。

（早くなんとかしないと露店が閉まっちゃう）

三平は、勇気をだして露店の横から、わた鮎屋の爺さんに声をかけました。

「お爺さん、おいらは三平です。看板ためきになって、お客を呼び込みますから、店をしめたあと、わた鮎を一つもらえませんか」

すると、

「おおそつかい、それじゃあ、たのもつか」

と、なぜか応えが返ってきました。それで三平はわた鮎屋の店先に行き、犬のようにお座りをしました。

これを見た男の子たちが、

「ためきだ。ためきが座ってる」

と騒ぎだしたので、わた鮎屋の爺さんは、

「そつじゃ、三平といつてな、店の看板ためきじゃと教えました。それから、

「一つ買えば、二回お手をさせられるぞ」

というつと、男の子たちはもちろん、女の子たちも我先にわた鮎を買いました。

お手をするためきなど、珍しいですからね。

三平は、わた鮎を食べることができました。

かかし

月も星も見えない夜、年寄りためきの三平が稲刈りの終わった田んぼの脇道を歩いていくと、とある田んぼに、竹の棒と布でこしらえたかかしが横たわっていました。

このかかしは、田んぼにイナゴを捕まえにきた子どもたちが、

「おい、このかかしの顔を見ろよ。へへのもへじだ」

「ソジャあ、へへのもへじだね」

と言いついていたかかしそのものです。

三平はかかしのそばにいき、藁をくるんだてぬぐいの顔にいました。

「あんた、へへののもへじだが、へへののもへじだかの、かかしだつてな。なんで横たわっているんだい」

かかしは顔の「」の「」の字を「」にして三平を見ました。そして、

「稲刈りがおわったんで、おらの役目は仕舞いになったのさ」

といました。三平は訊きました。

「役目？ 役目つてなんだい」

「鳥たちを追っ払って、田んぼの稲穂が食べられんようにする役だわい」

「あんた、ちゃんと役目をはたしたんかい。まるで放つぱり出されたみたいじゃないか」

「きちんと役目をしたさ。こんな顔だからカラスや

スズメに笑われたけど、体を揺すって驚かしたり、口笛を吹いて驚かして、稲の穂が食べられんように一所懸命働いたわい」

「そんな働き者を、からつぼの田んぼにうつちやるなんて、思知らずのあるじだな」

「ご主人様を悪くいうな。仕舞い忘れただけだ。明日は落ち穂を拾いにくるはずだから、連れ帰ってくるぞ」

初雪の降った夜、三平はたまたま、あの田んぼの横を通りかかりました。白い雪をのせたかかしが顔を地面にうつぶせて横たわっていました。

三平は、黙って通りすぎました。

盆踊り

八月十三日の朝、稲穂神社に十数人の男衆が集まってきました。かれらは、神社の床下に仕舞われていた丸い柱や板を運び出し、社殿の横で櫓を組みま

した。櫓の上部に板を敷いて床を作り、社殿の太鼓を上げました。社殿のコンセントから、祭り提灯が二十ほどついた電線をのぼし、櫓の先端までを飾りました。櫓の裾は紅白の幕で囲いました。三平は神社の床下の陰から、その様子を見ていました。

夕暮れ前、二人三人と村人が集まってきて、祭り提灯に明りが点り、炭坑節の唄がラジカセから流れました。

櫓にのぼった若衆が太鼓を叩くと、踊り手に活気がみなぎりました。その数四、五十人。

三平は、踊り好きの村人の数に驚きました。

翌日。盆踊りの踊り手はさらに増えて、六十人ほどになりました。床下の陰で三平は、

(はて、隣の村からもきてるんかな...) と思いました。

十五日は何と八十人を超えました。誰もが和気あいあいと挨拶しあい、語りあい、笑いあい、踊りま

した。

盆踊り最終日の十六日は、人がばらばらと集まり、二十人ほどが踊りました。踊りが終り、人々が去り、明りが消えたとき、櫓のかたわらに、なんと黒いたぬきがいきました。三平は走りより、黒いたぬきに訊きました。

「あんた、いまさっきまで踊っていたんかい」

「ああそつだよ。昔からおらたちは、それぞれの家に戻った精霊の姿を宿して、十五日まで盆踊りに加わるんだ。ところがさあ、おらが今年宿した若い男は、許嫁だった女性が十六日も踊るなら一緒に踊りたいっていいだしてな。相手は婆さんになつてのにな。それでもいいんだとき...。七十年も昔の男の想いにまけてよあ...、踊ってやってたんだ」

### 三滝

長老たぬきの助十が、稻里神社の境内で年寄りた

ぬきの三平にいいました。

「村人の噂じゃあ、竜宮島の洞穴から古文書がみつかったな。それは三滝の滝壺のどれかにお宝を隠したというものだったそつな」

三平は尋ねました。

「お宝ってなんだい？ 誰が隠したんだい」

「それが分からん。書いてなかったらしい」

「三滝って、清瀬川の上流にある、あの三滝のことかえ？」

「そつじゃないかと村人の何人かが、三滝に出かけたそつだが」

「お宝は見つかったかい」

「それが、見つかったどころじゃなくて、誰も戻ってこないから村は大さわぎだ」

助十は声をひそめていいました。

「どついついとか、様子を見に行かんか」

「おもしろそつだな。行くまい」

そして三平と助十は川沿いの小径を遡って三滝にきました。木々が辺りを覆う三滝は高さ三十メートルほどの崖の上から滝が三つ連続し、それぞれに滝

壺をつくっています。

三平は一番下にある四畳半ほどの広さの滝壺のふちで水の中をのぞきこみました。木々が黒く映る水面に三平の顔が映りました。褐色の丸い顔です。小さく丸い黒目の回りに灰色の楕円形模様があります。

と、その顔が緑色にかわり、黄色いくちばしと短い黒髪の生き物になったとたん、そいつが水をはね上げて水中から飛びだし、そして三平に抱きつつかや滝壺に飛び込みました。

「つわっ、たすけてー」

と三平が叫びましたが、助けはなくて滝壺深く沈んでいくばかり。

そのとき、ザボンと音がして、滝壺に飛び込んだサルがすごい勢いで三平たちに近づいてきました。とたん、三平を抱いた腕がゆるみ、抱きついてたものが消えました。

サルは三平を水面に抱え上げ、いいました。

「あぶなかつたな、爺さん」

年寄りたぬきの三平は、なにものかに水中へ引き込まれた滝壺のわきで、激しく息をしながら横になっていました。長老たぬきの助十が心配げに覗き込みながら、

「三平、三平、なにがあつたんだ。急に姿が見えなくなつたと思つたら、サルに抱かれて水の中から出てきたりして」

といいました。グエツとせき込んだ三平が、  
「わからん。水に映る自分の顔を見ていたら、顔が緑色の生き物に変わり、途端、水の中に引き込まれたんだ。そして運よく、サルに助けられた。あの生き物はいつたいなんだ」

というと、助十の後に姿を見せたサルが、  
「河童だ。昨今、滝壺に棲みついたらしい」と教えめました。

「河童だつてー？」

三平と助十が同時に声を上げました。

「そつだ。河童だ。爺さん、やつは緑色の顔と体をしていだらう」

「ああ、はつきり見た」

「口は黄色だつたらう」

「そつだ、黄色だつた」

「あんなとんでもないやつがいる場所に、爺さん、なんで来たんだい」

とサルが訊きましたので、三平は理由を話しました。するとサルが、

「古文書か。そいつは怪しいな。あるいは河童が仕掛けたワナかもしれんぞ」

といいました。三平が、

「どんな、ワナなんだい」

と訊くと、

「この滝に人を呼び寄せるワナさ。人が来たら、爺さんがされたように水中に引き込んで、生き肝を食うんだ。戻らない村人は、おそろく生き肝を食われてしまったにちがいない」

とサルが言い、驚いた長老たぬきの助十が、

へちま ひょうたん 猿

「そりゃあ大変だ。どうすべえか」  
「おれが村へいっていいいぶらすとしよう」  
といったサルが、くるつとでんぐり返ると、五歳ほどの童子になりました。

## 数え唄

黒いたぬきが化けた童子は、村へ行って、即興の数え唄を歌い歩きました。

ひとつ ひとに話すもおぞましいが

ふたつ 蓋することはできねえや

みつつ 三滝の滝壺にや

よつつ 世にも恐ろしい

いつつ 生き肝食う河童

むつつ 昔からのもんじゃねえ

ななつ 流れ流れて昨今棲んだ

やつつ やつの嫌いな物を

「このつ 「こでみんなに教えちゃう

とお とうきび くるがね はもの

すると次第しいに村の子どもたちが集まってきた、童子のまねをして歌いました。

歌声を聞いた村人が、なにことかと家から外に出て、聞き耳を立てました。

「なんだつて、三滝に生き肝を食う河童だと」

「村の衆が帰つてこねえのは、それでかや」

「恐ろしい恐ろしい」

「なんまんた、なんまんた、どうすべえ」

などと大人たちが話を交わし、

「村長にこの先どうするか、うかがうべえ」と決まりました。

話を聞いた村長は、

「まずは三滝に近づかないことじゃ。どうしても行かなきゃならなくなったときは、河童が嫌いだといつものを持つていくことだな」

といいました。すると村人の一人が、

「おら、なかまの仇をつちてえ」

といいだしました。



「おらも」「おらも」

と声が起こり、村長は次のように言わざるを得ませんでした。

「わかった、わかった。明日の朝、皆それぞれ河童が嫌いなものをもって三滝へ行こう」

かくて三滝の滝壺から河童は逃げ消えました。どこに行ったかは、わからん河童の屁。

わんわん

年寄りたぬきの三平がトマトやナスやトウモロコシなどが植えられた畑の中を通って、小さな池の畔の農家の庭に入ると、赤い着物の幼い女の子が縁側に腰かけていました。

三平はすぐさま花壇のホウセンカの群に隠れましたが、三平を見とらえた女の子は立ちあがって赤い鼻緒の下駄を履くと、

「わんわん、おいで。わんわん、おいで」

と手招きして呼びかけました。

「わんわん？ わしを犬だと思ったのか？」

三平はホウセンカの葉陰から女の子を見ました。二歳ほどの、おかつは頭の子です。

三平は、姿を見せたら女の子がどんな反応をするか気になりました。そこで、叢の後から頭だけ見せました。すると女の子は喜んで、

「わんわん。おいで、おいで」と呼びました。

三平は、女の子はこれまでたぬきをみたことがないようだと感じました、三平を犬と思いこんでいるとわかりました。そこで、

「よし、のぞみとおり、犬の振りをして出てやる」と決め、太いしっぽを振りながら女の子に近づきました。すると女の子は、

「おすわり」

といいました。三平はお座りをしました。女の子は中腰になり、

「おいで」

とこつて、右の手のひらを出しました。三平はその

手に左前足をのせました。

「おまえは、おりこうな、わんわんだね」

と女の子が三平にいったとき、

「なっちゃん、なっちゃん、なにしているの」

と家の中から大人の女の人の声がありました。

ふりむいて、さっちゃんが応えました。

「ママ。わんわんと、あそんでいるの」

三平はトタトタ逃げました。その後姿を見たさっ

ちゃんは口を尖らせ残念がりました。

「おかあさん、わんわんいっちゃん。おりこうな、

わんわんだったの……」